

University Academic Repository

ソーシャル再考：
言語研究史における評価の妥当性を問い直す

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高野, 秀之, タカノ, ヒデユキ, Takano, Hideyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/265

研究論文

ソシュール再考

～言語研究史における評価の妥当性を問い直す～

On Saussure

An appropriate interpretation of Ferdinand de Saussure
in the history of linguistic study

高野 秀之

Hideyuki TAKANO

<要 約>

本稿は、ソシュールの一般言語学理論を再考することを通じて、言語研究の歴史における、その評価の妥当性を問い直すものである。

言語研究の歴史において、ソシュールはさまざまな批判にさらされてきたが、その中には、ソシュールの思想や学説への不理解や誤った歴史認識に基づいたものもある。そうした誤解を払拭するために、ソシュールの思想や学説を可能な限り忠実に再現した後、ソシュールに向けられた批判の型を『一般言語学講義』の成立事情に基づくもの、ソシュールの言語理論自体に関するもの、歴史認識にかかわるものの3種類に分類し、それぞれを検証することを通じて正当な評価を下すことを試みる。

筆者は、人間の知的活動としての理論構築というものが、対立や批判からのみもたらされるとは考えない。それは、既存の理論や学説と相互に関連し合いながら、視点の位置と適用範囲の変遷によって刷新されてゆくものである。その視点と適用範囲とが時間の経過とともに増加・累積し、洗練されてゆく過程が言語研究の対象であるとするソシュールは、批判の対象ではない。それは、言語研究の対象と方法とを示しながら、それを自らの手で一冊の本にまとめることを躊躇したこと、ただ一点においてのみであると考ええる。

<キーワード>

ソシュール、『一般言語学講義』、人間科学、記号学、記号体系、差異性に基づく関係、記号の恣意性、社会的事実

I. はじめに

本稿の目的は、ソシュールの「一般言語学理論」を正確に捉え直すことにより、言語研究の歴史におけるその評価の妥当性を問い直すことにある。

ソシュールが言語理論の構築に専心していたのは、19世紀後半のことであった¹⁾。それを、1世紀以上後の世において取り上げようと試みる理由は、大別して2つある。第1の理由は、歴史的事実として受け入れられている言語研究の成果に対し、内側（即ち、言語学の側）から疑いの目を向け、それを定期的に検証し続けることは学術的に有意義だからである。いずれの理論や学説も、自然発生したものでなければ、偶然、歴史に登場した天才が単独で導き出したものでもない。新しい理論や学説というものは、それに先立つ研究成果をもとに成立しているのである。この事実を踏まえると、20世紀の言語学のみならず、哲学史・思想史の源流の1つとなったソシュールの考えを21世紀の視点で捉えなおそうとする試みは、最新の言語理論や学説を取り込むうえで、とても重要なことだと言える。なぜならそうした理論や学説の成立過程に関わる背景的な知識としてソシュールを再考すれば、言語研究に関する認識を新たにすることが可能になるからである。こうした取り組みを怠れば、後発の研究者はみな、先行する研究者たちの解釈というフィルターを通して形成された歴史を真実として受け入れる以外に、ソシュールの思想を理解する道が閉ざされてしまうことになる。そこで、第II章はソシュールの言語理論の基盤となる基本的な概念をいくつか取り上げ、それらを順に解説してゆく。そこでは、ソシュールの思想をできる限り忠実に再現しようと試みる。

第2の理由は、ソシュールの思想や学説が言語研究の歴史において不当な評価を受けているという事実を明らかにし、そこからソシュールを救い出すことが必要だからである。彼の死後、それまで手つかずのまま放置されていた膨大な資料をもとにした調査・研究が実施された。その結果、ソシュールを言語学の祖と称する言語研究の中にも、記号学²⁾を理論的基盤とした言語理論を見誤っているものが少なからず存在するということが実証されている³⁾。同様に、ソシュールを神格化してしまい、ソシュールが言語学の歴史上、それに先立つ言語理論とは無関係に成立しているように捉えてしまう傾向が見られる。そこで、第III章は、『一般言語学講義』の成立事情、ソシュールの対象認識の過程、更には、歴史認識の誤りが導き出した不当な評価について検証する。

最終章となる第IV章では、最新の言語理論である認知言語学とのかかわりについて言及しつつ、ソシュールが現代の言語学に多大な貢献をしているということを再確認する。

II. ソシユールの言語理論の基本概念

人間が自ら作り出したものによって逆に支配され作られていくという、一切の文化的営為のもつパラドックスでもあるのでしよう。(丸山 2008, p. 72)

「言語学は言葉を研究する学問領域である」、「言語学の研究対象は言葉である」と言えば、誰もがそれは当然のことであると思う。しかし、「言語学が研究対象としている言葉とは何か」という問に対しては、どれだけの言語学者が明確な答えを提供することができるであろうか。言葉とは、人間に生得的な言語能力であり、英語、ドイツ語、フランス語といった国語体でもある。このほかにも、個人が話す言葉や手紙に書き著された文字、標準語や方言、挨拶、心の中に押し留めた気持ちもまた言葉である。ソシユールは、この多義的な言葉という語を厳密に規定することによって、言語学が研究の対象とするものを明らかにし、既成の言語学に新たな視点を導入した。

1. 人間の言語能力、文化的・社会的制度、個々の言語使用

上で述べたような日常的な言語現象への疑問に対し、ソシユールは人間の普遍的な言語能力(例えば、カテゴリー化能力、抽象化能力、象徴化能力)をランゲージュ (*langage*)、同一の共同体の構成員同士が理解しあうことを可能せしめる文化的・社会的慣習(或いは、秩序)の総体をラング (*langue*) と呼び、その両者を峻別した。丸山 (1981, pp. 79-80, 2008, p. 66) の解釈によれば、ランゲージュとは文化の根底に見られる人間の生得的な潜在能力で、それは共同体が作り上げた社会制度の中で文化的な(即ち、人間らしい)生活を通じてのみ、顕在化するものである。それに対し、ラングとは、ランゲージュがそれぞれ個別の社会において顕現されたものであり、その社会固有の独自の構造をもった制度(或いは、文化の総体)であると説明する。したがって、狼に育てられた人間の子供にはラングを形成する環境としての社会が、人間社会の中で育てられたチンパンジーにはランゲージュが欠落していたため、両者とも最後まで言葉を話すことができなかつたと結論づけている⁴⁾。

ソシユールは、ラングを顕在的な社会制度とはしていても、具体的・物理的な実体としては認めていない。むしろ、ラングとは個人の脳内に作られる心的な機構であり、人間はそれを通じて経験を分析し、発話の際に必要な選択を可能にしていると考えた。

…ある特定の言語においては、音声の対立のさせ方、組み合わせ方、単語の作り方、単語同士の結びつき方、語順、そして単語の持つ意味領域などには一定の規則があり、この規則の総体がラングであって、これはあくまでも個人を超えたところにある抽象的な制度であり約

束事であり条件でもあるのです。

(丸山 2008, p. 70)

集団における「約束事」や「条件」が誰にでも簡単に操作・変更されるようなことがあれば、いかなる組織・制度・機構も機能しない。そして、この点においてはラングも例外ではない。したがって、比較的安定したラングは、文化的・社会的なコードとして見なすことができる。しかし、実際の発話（広義の言語使用）の場面では、さまざまに揺らぐ人間らしい振る舞いがラングの安定性を脅かそうとする。そこで、個々の話し手による（同時に、それぞれの場面における）言語行為とコードとしてのラングとを区別するため、ソシユールは実際の言語使用をパロール（parole）と呼んだ。

ラングとパロールとは、相互依存の関係にある。パロールの実現はラングという制度に依存しているとともに、ラングはパロールの事実がなければ成立せず、また、再編成されることもない⁵⁾。ここで、ラングとパロールとの不可分の関係が言語の創造的な側面のみならず、人間による文化形成の過程、さらには人間の本質までも示唆しているという点を見落としてはならない。

輪郭も形も実体もなかった現実ラングの発動によって分割され、ラングの体系内に蓄積され、体系化され、パロールとして実現される。このように、人間が主体的に混沌とした世界を意味づけようとする心的活動から言語使用に至る過程には、ものごとを類推に基づいて秩序づけようとする人間の心性を見て取ることができる。また、人間はラングという文化的・社会的なコードという制約の内であって、しばしば、語りつくせぬ思いや言い表しような感情を抱く。そうした場合、人間は既存のコードを逸脱することを余儀なくされる。その結果、社会の慣習に従っていないと判断された構成員は社会的な制裁を受けることになる。ところが、社会のコード（即ち、ラング）を逸脱した言語表現（即ち、パロール）が不特定多数の構成員によって繰り返し使用され、その共同体に受け入れられると、その表現方法はラングの体系に取り込まれる。そして、その事実が新たにラングを再編成する原動力になるのである。

安定を好みながら、類推に基づいて自ら築き上げた「秩序」という枠組みの中だけでは満足できないという人間の本質は、ラングとパロールとが相互依存の関係（即ち、作り、作られる関係）にあるということと、何ら無関係ではあり得ない。

個人の言葉が人から理解されるためには社会の約束事がなければならないが、その約束事が成立するためには、まず個々の具体的発話がなくてはならない。また個人がラングを獲得でき習得できるのはあくまでも社会生活を通してであり、しかも個人ひとりではそれを変えることができず、むしろあるがままのラングを押しつけられるのも事実であれば、歴史的には常にパロールが先行したのも事実である。この作りつつ作られ、作られつつ作るという相

互規定が、ちょうど社会とその中に住む個人のような関係にも似て、ラングとパロールの間に見られることの指摘は、第一回講義の後半、「類推による創造」においてなされた。

(丸山 1981, p. 84)

ラングとパロールの相互依存関係には、人間が自らの経験を通じて獲得した意味を、脳内の辞書（或いは、心的な辞書 *mental lexicon*）に登録していると捉える言語習得の過程との類似性を見て取ることもできる。例えば、ある経験を通じて理解した語の意味は、繰り返し使用することによって長期記憶される。同時に、その語の意味領域は、ラングという文化的・社会的なコードの体系内で安定性を保とうとする。しかし、実際の言語使用（即ち、パロール）の中で、その語が他の語の意味を取り込んだ（或いは、逆に、他の語の意味に取り込まれた）場合、その語にはラングが保証する以上の意味が与えられる⁶⁾。その語が拡張された意味の領域においても繰り返し使用され続けると、脳内の記憶装置（即ち、心的な辞書）が再編成され、その結果、その語の使用領域（即ち、ラングが定める配列の可能性や、意味領域）が拡張される。実際の言語使用という過程を経て、語はその使用方法（即ち、語法）、意味、文法、語形、音を変化させているのである。この事実に基づいて、ソシュールは言語記号が潜在的に変化の可能態であると考え、これを言語記号の可易性と呼んだ。

しかし、同時に、文化的・社会的慣習の総体としてのラングが頻繁に変更されてしまうと、人間相互のコミュニケーションが成立しなくなるという事態を引き起こすことになってしまう。そこで、言葉の伝達機能を保証するために、ラングには、比較的、安定した文化的・社会的コードとしての役割が期待される。ソシュールは、ラングの安定性に記号の不易性も認めた。しかし、記号の可易性と不易性という二重性は、単なる矛盾ではない⁷⁾。

It would be wrong to reproach F. de Saussure for being illogical or paradoxical in attributing two contradictory qualities to language (=langue). By opposing two striking terms, he wanted only to emphasize the fact that language (=langue) changes in spite of the inability of speakers to change it. One can also say that it is intangible but not unchangeable. [Ed.]

(Baskin 1966, in the footnote of p.74)

カッコは筆者による

ソシュールは、人間がこの世に生を受けると同時に行動全般（含、思考）に制約を受けるのは、既成のラングが厳然として存在し、それが「社会的事実」として我々を縛りつけているためであると考えた。また、ソシュールは時間とともにすべてのものが変化するように、言語記号も（その他の記号とは異なったやり方ではあるが）変化すると考えた。ソシュールが言語記号に可易性と不易性という両義性を認めたのは、上の引用に先立ってすでに表され

ているように、言語学の研究対象を明示するためでもあった。

The study of speech (=langage) is then twofold: its basic part—having as its object language (=langue), which is purely social and independent of the individual—is exclusively psychological; its secondary part—which has as its object the individual side of speech (=langage), i.e. speaking (=parole), including phonation—is psychophysical.

(Baskin 1966, p.18)

カッコは筆者による

ここで重要なことは、次の2点である。第1に、「ラングは心的である（即ち、個人の意識の中にある）」と声明することにより、言語は閉じた体系となる。閉じた体系は、言語学にとって自立した研究対象となるだけでなく、時間の影響を受けないため、言語研究は歴史的变化への対応から解放されることになる。そのため、言語を共時態として捉えることが可能になるのである。第2に、言語学の研究対象となった言語を共同体が共有する社会的慣習（即ち、ラング）として捉えることにより、コトバは「社会的事実」となる。そのため、ラングは個人や集団に還元することのできない、文化的・社会的な権力となるのである。

2. ソシュールの思想：人間科学

ソシュール以前の言語研究にとって、人間とは文の要素としての意味役割を果たす、モノ化された文法事項としての人間のことであった⁸⁾。そうした研究に共通していたのは、すべての研究対象から言語を独立させ、言語学を既存の学問領域に比肩するものにまで高めようとする試みであった。その実現に向けて採用されたのは、言語を自然科学の対象として捉えることにより、その発生から変化に至るまで人間の意志はまったく介入しないという言語観であった。自然科学として言語学を成立させようとする研究者たちが、これほどまでに人間の存在を排除しようとするのは、人間が誤り、忘れ、思い込み、思い違いをし、時には意図的に社会的慣習に背くことさえあるからである。科学的な言語学にとって、人間は最も扱いづらい対象の1つであると考えられていた。こうした伝統的言語学の自然科学指向に対して、ソシュールは「epistemologie（思想の側からの科学批判）」をもって異論を唱える。

エピステモロジーとは、19世紀ドイツの社会学者であるマックス・ウェーバー（Max Weber 1864-1920）の「Wertkritik（科学的な方法による思想や宗教の価値批判）」とは対照的な概念であり、過度に科学的・客観的であろうとする思想批判もまた、1つのイデオロギーなのではないか、という問題意識に基づいた「価値批判（或いは、価値判断）」のこととされている⁹⁾。それは、ソシュールの思想上の基盤であり、科学的法則至上主義というイデオロギーに対する異議申し立てであると同時に、価値判断の主体としての人間を研究対象とす

る、新たな学問の要請でもあった。そして、ソシユールはそれを記号学と呼んだ。

ソシユールの記号学は、既存の学問体系（或いは、学問領域）を前提としていたのではその全容を十分に捉えることができない、「人間科学」とでも言うべき広がりをもつものとして想定されている。それを文字通りに解釈すれば、記号学は人間を対象とした科学ということになる。しかし、その背後には、人間という種には多くの不確定要素があるため、客観的な同一条件の下にあっても、常に同じ結果を期待することはできないということが示唆されている。しかし、このままでは、自然科学の法則で人間の本質を解明することは不可能になってしまう。それに対し、ソシユールはどのように考えたのであろうか。

ソシユールは、あらゆる対象（即ち、現実）の意味を読み取り、その意味を共有することを通じて文化を創造し、その文化を社会的規範（或いは、慣習）として生活を営んでいるという事実から人間の特性を見出した。人間は、あらゆる事物や現象を、相互の関係性に基づいて区分（即ち、カテゴリー化）し、心的に構造化させ、概念化し、その意味を伝達可能なものとして表出させる（即ち、象徴化する）。人間のコミュニケーションを可能にするものこそが言語能力としてのランゲージュであり、ソシユールはそれを生得的な潜在能力として位置づけている。また、ソシユールは、この言語能力を社会生活の中で顕現する社会的な慣習（即ち、ラング）として定め、そこに至る過程において働きかけるものを記号という概念体系の因子として想定した。これにより、社会的な慣習としてのラングは、人間の主体的な意味づけの対象（即ち、現実世界）と実際の言語使用（即ち、パロール）との中間に位置づけられた。ソシユールは、人間が認識対象となる現実を理解し、その意味を実際の言語使用として表出する過程で記号が仲介すると考えたのである。記号を通じて人間が創造的な営みを行っているという点を、池上（2002）は次のように説明する。

実は、記号論がもっとも関心を寄せるのはこの営み — つまり、既成の決まりに従って意味がいわば機械的に読みとられるというのではなく、自らが積極的に主体的に意味を読みとり、それによって<記号>を創出するという創造的な営み — なのである。この種の営みでは、意味の読みとり方についての既成の決まりが超えられ、改められることも、また、何もなかったところに新しい読み方が始めて提示されるということもある。

（池上 2002, pp. 17-18）

また、ソシユールは、人間の普遍的な特質を言語理論に反映させようと試みたため、言語の意味や形態の変化を（池上の表現を使えば）「人間の主体的な意味づけの営み」と関連づけて、「実質的な変化」と「関係からなる変化」とを峻別した。ソシユールの言う実質的な変化とは時間の経過に伴う文化的・社会的要請によるものであり、したがって、言語学にとってそれほど重要なものではない。それに対し、関係からなる変化というものは、記号体系という概念の中で、その記号（或いは、辞項、因子）相互の関係に基づいた変化なので、言語学

が優先させるべき対象として捉えた。ソシュールは、言語研究には通時態と共時態という2つの様相が存在することを認めるとともに、実際の言語使用の場面で人間が通時態としての言語を意識していないことを理由に、共時態を優先させたのである。

ソシュールによって記号学という「人間科学」が想定され、コトバの共時的研究の優先性が示されると、歴史言語学や比較言語学に託されてきた「言語の起源」や「祖語」の探求、絶対主義に基づいた「規範文法」の正当性、プラトン以来の唯物論的な「実在論」は、すべて退けられた。人間の意識が及ぶものすべてを包摂してしまう記号という概念を導入することによって、ソシュールは伝統的な言語研究との決別を果たしたのである。現代的な意味での言語学の基盤を築いたという功績こそ、ソシュールが言語学の祖と称される所以である。

3. 記号学

ソシュールは、学問領域としての確固たる位置づけを言語学にもたすために、既成の学問体系をすべて包摂してしまうような独自の科学を想定した。そして、それこそがソシュールの考える記号学であり、人間を取り巻くすべての世界を対象とする新しい科学であった。ソシュールの『一般言語学講義』において、始めて記号学が登場する部分を引用する。

Language is a system of signs that express ideas, and is therefore comparable to a system of writing, the alphabet of deaf-mutes, symbolic rites, polite formulas, military signals, etc. But it is the most important of all these systems.

A science that studies the life of signs within society is conceivable; it would be a part of social psychology and consequently of general psychology; I shall call it semiology (from Greek semeion 'sign'). Semiology would show what constitutes signs, what laws govern them. Since the science does not yet exist, no one can say what it would be; but it has a right to existence, a place staked out in advance. Linguistics is only a part of the general science of semiology; the laws discovered by semiology will be applicable to linguistics, and the latter will circumscribe a well-defined area within the mass of anthropological facts.

(Baskin 1966, p.16)

ソシュールは、「ラングは体系を成す」と考えた。一般的に、この体系という概念は「個々の要素が相互に関わりあっている総体」や、「部分からなる全体」という意味で捉えられている。しかし、それでは、あらかじめ全体を構成する部分が存在していたことを認めることになり、古代ギリシャ以降の言語研究者が唱えた言語命名目録観に逆行してしまうことになる。それに対して、ソシュールはどのように記号の体系を捉えていたのであろうか。

(1) 記号体系

ソシユールが考えた体系とは、全体があつてはじめて個が存在するものであり、独立した個々の要素が寄り集まって全体を作るというものではない。それは、記号体系全体と記号、または、記号相互が差異性に基づく価値の体系を成し、それらが言語記号として表出して初めて意味が生じる体系のことである¹⁰⁾。

記号が差異性に基づく価値の体系の中においてのみ意味をもつという考えは、換言すると、意味は記号に内在するものではなく、他の記号との否定的な関係から導き出されるものであるということになる。ここで言う「他の記号との否定的な関係」とは、記号相互には「異なる（即ち、『そうでない』）」という対比の関係が成立していることを表す。ソシユールの考えた記号は、他の記号との関係によってのみ、その価値が認められるものである。

否定的な関係によって価値づけられた記号は無秩序に存在しているのではなく、相互に関連し合いながら価値の体系を構築している。その典型的なものが、親族関係の構造である。両親、兄弟・姉妹、祖父母、おじ・おば、いとこという関係は、性別・直系・世代という、いわゆる「意味の成分」のようなもの（現代の意味論で言うところの「意味素性」）を整理・確立することにより、より明確に記述することが可能になる。

ソシユールの体系が意味するものは、部分から成る全体ではなく、記号相互の関係（即ち、差異性に基づいた対比）を前提として、はじめて各要素の価値が認められる体系である。この体系内では、いかなる記号も決して孤立したものとしては存在し得ない。ソシユールの記号体系は、伝統的な還元主義¹¹⁾とは正反対のものである。

(2) 記号の内部構造：シニフィアンとシニフィエ

個々の記号は言語外現実を指し示すものではなく、他の記号との差異性に基づいて形成する価値の体系において意味をもつ。したがって、記号は表現であると同時に内容でもある。では、表現と内容から成るものとは、どのようなものであろうか。

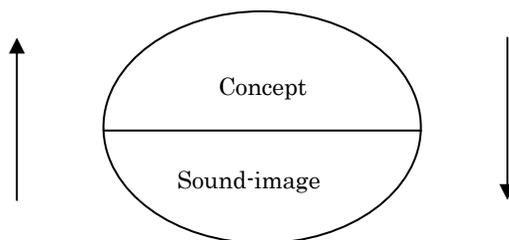
The linguistic sign unites, not a thing or a name, but a concept and a sound-image. The latter is not the material sound, a purely physical thing, but the psychological imprint of the sound, this impression that it makes on our senses. The sound-image is sensory, and if I happen to call it “material”, it is only in that sense, and by way of opposing it to the other term of the association, the concept, which is generally more abstract.

(Baskin 1966, p. 66)

下線部は筆者による

「物理的な音声」ではなく、「音声の心的な刻印」とされる音響イメージは、もとより、実質を伴わない概念との結合によって記号を形成する。それを表したものが、下の図1である。

図1. 記号の内部構造(1)



(Baskin 1966, p. 66)

概念と音響イメージは、それぞれ、実質を伴わないという性質を共有している。しかし、記号 (sign) という用語が象徴 (symbol) と混同され、或いは、概念が指示対象の意味に、音響イメージが実質を伴う音声に結びつけられることを避けるため、ソシュールは記号内部の構成要素の名称を (直後で) 変更することを示唆している。

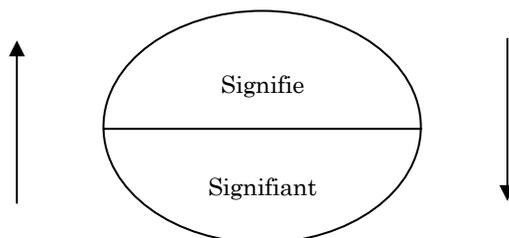
I propose to retain the word *sign* [*signe*] to designate the whole and to replace *concept* and *sound-image* respectively by *signified* [*signifié*] and *signifying* [*signifiant*]; the last two terms have the advantage of indicating the opposition that separates them from each other and from the whole of which they are parts.

(Baskin 1966, p. 67)

下線部は筆者による

シニフィエは *signify* の過去分詞、シニフィアンは *signify* の現在分詞である。この用語により、前者は「記号の内容部分 (即ち、*signified*)」を、後者は「記号の表示部分 (即ち、*signifying*)」を表している。それぞれを置き換えたものが、下の図2である。

図2 記号の内部構造(2)



(Baskin 1966, p.114)

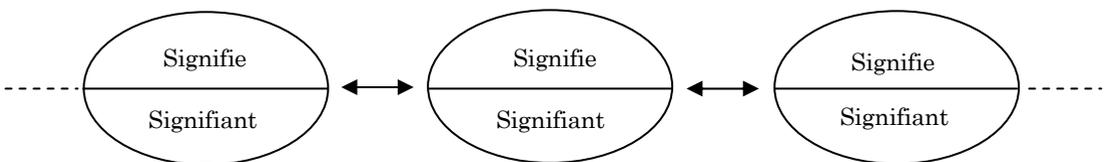
ランゲージュの発動によって分節された現実世界を認識可能なものにする過程において、実質を伴わない（即ち、心的な）シニフィエとシニフィアンは、言語共同体に共有されているコードによって結びつけられ、記号を形成する。形成された記号はラングの中に蓄積され、差異性に基ついた価値の体系を構築してゆく。シニフィエとシニフィアンは不可分の関係にあるため、どちらか一方だけを取り出すことはできず、したがって、どちらか一方だけが顕現することもない。シニフィアンとシニフィエの結合（即ち、記号）は、「form であって、実質ではない（ibid, p. 113）」のである¹²⁾。

(3) 記号の恣意性

「恣意性 (arbitrariness)」は「動機づけ (motivation)」の対義語であり、「制約がない」、「自由で気ままなこと」という意味ではない。ソシユールが「シニフィエとシニフィアンとの結びつきは恣意的である」と言う場合、両者を結びつける自然、かつ、論理的な絆は現実世界には存在しないという意味である。例えば、日本語で<イヌ>というシニフィエを[inu]というシニフィアンで表示しなければならない理由は存在せず、それは先の図2で表された記号内部だけを観察すれば、(原理的には) 検証可能なものである。

また、記号体系内の記号相互間にも恣意性は存在する。ラングの体系において、記号相互は差異性に基ついた価値の体系において意味をもつということは既に述べた。この、記号相互の否定的な価値の対立関係からのみ意味をもつ恣意性を表したものが、下の図3である。

図3 記号の価値体系



(Baskin 1966, p.115)

ソシユールは、分節される以前の連続体である現実世界が非連続体に区切られる方法が恣意的であると考えている。そこで観察される恣意性を説明するために、記号成立の過程で現実世界がランゲージュの発動によって分節されることを振り返ってみたい。

何ら輪郭も区切りももたない現実世界は、人間の意識が向けられたとき、ランゲージュの発動で分節される。

A few examples will show clearly that this is true. Modern French *mouton* can have the same signification (=signifiant) as English *sheep* but not the same value, and

this for several reasons, particularly because in speaking of a piece of meat ready to be served on the table, English uses *mutton* and not *sheep*. The difference in value between *sheep* and *mouton* is due to the fact that *sheep* has beside it a second term while the French word does not.

(Baskin 1966, pp. 115-116)

カッコは筆者による

ソシュールは、対立によって価値の体系を成す記号相互の分節のし方は、あくまでも、その言語共同体における文化的・社会的な慣習（即ち、ラング）によって定められているものであるとし、それ以外には一切の動機づけを認めていない。

ソシュールが恣意性を第一原理としたことに関して、町田（2004, pp.48-51）は、（シニフィエとシニフィアンの関係にのみに言及しているものの）言語の変遷を保証する原理として説明している。

ソシュールはどのように恣意性をこれほど重要視したのでしょうか。恣意性とコトバの性質が密接に関係しているからです。恣意性が原因となるコトバの性質としては、まずどんな言語でも変化することがあげられます。どんな言語の単語でも、音素列と意味との間の関係は恣意的ですから、時間が経つにつれて、音素列は同じでも意味が変わることもありますし、逆に意味が同じでも音素列が変わることもあります。ある意味に対応する音素列はどんなものであってもいいのですから、時代によってその関係が変化することがありうるのは、考えてみれば当然のことです。

(町田 2004, p. 49)

また、池上（2002, pp. 51-61）は、シニフィエとシニフィアンの関係には連想の型に基づいた「有契的 (motivated) / 無契的 (unmotivated)」という分類が可能であることを示唆したうえで、両者の関係が「恣意的でなかったら」という立場から、言語のあり様と記号の恣意性との関係に言及している。

もし、ある特定の語形であれば、その語形が私たちに与える感じによって、ある特定の語義に自動的に決まってしまうというようになっていたら、人間の知識や関心の拡がりと共に新しい語が必要となってきた場合、新しい語義内容にふさわしい新しい語形が見つかるという保証もないし、それに、既存の語形に何か新しい語義を託すということも許されないわけである。そのようなことになれば、人間のコミュニケーション上の必要を満たすことができないうばかりか、比喩的な転用を含めて、例えば詩に見られるような言語の創造的な使用もまったく不可能ということになってしまう。このように考えると、表現と伝達の媒体と

しての言語の有する可能性にとって、言語記号の〈恣意性〉ということが深い関わりを持っていることが理解できる。

(池上 2002, p.26)

ソシユールは、池上が示唆したように、シニフィエとシニフィアン結びつき方には記号が言語記号として慣習化するまでの段階があるという認識を示してはいない。しかし、ただ単に言語の相対性を持ちだして、個別言語間の表示部分が恣意的に異なるということを行っているわけでもない。ラングの慣習性が言語共同体によって形成された文化や社会に依存していることと、そこに生きる人間の意識が現実世界をどのように区切るかということについて、なんら自然な結びつきが見られないと主張しているのである。

(4) 連合関係と連辞関係

言語には伝達機能があり、これを否定する言語理論はない。ソシユールの記号学も、記号が伝達という役割を果たすうえで、相互に関わり合いをもつということを認めている。記号体系全体と特定の記号という選択の関係と、記号相互に見られる配列の関係により、心的な記号は言語記号として機能するのである。ソシユールは、この選択の関係を「連合関係 (associative relation)¹³⁾」、配列の関係を「連辞関係 (syntagmatic relation)」と呼んだ。これらは体系を作り上げる機能の両面でもあり、決して切り離すことはできない相互依存の関係にある。

① 連合関係

連合関係とは、(原則として) 具体的な言語使用の場に現れる資格をもちながら、話者の選択からもれた(即ち、発話のコンテクストから排除された) 要素群(即ち、心的な記号)と体系全体との潜在的な関係のことである。これを発話レベルで表したものが、下の図4である。

図4 発話と連合関係

She	Hugged	him
My girlfriend	Loved	the best friend of mine
Sally	Hit	Tom
Suzan	Struck	William
John	Punched	me
...

四角い枠で囲まれた部分が実際に発話されたもので、その上下に配置されたものが連合関係にある潜在的な要素群であるということを表している。今、特定のコンテキストの中で実際に述語動詞として発話された *hit* に注目すると、その上下に配置された *hugged*、*loved*、*struck*、*punched* はどれも、文法的に連合関係にある。同様に、動詞の活用という面で捉え直せば *hit* (原型不定詞)、*hit* (1人称・2人称現在)、*hits* (三人称単数現在)、*hit* (過去)、*hit* (過去分詞)、さらに、*Be* 動詞や *Have* 動詞を含め、助動詞とともに選択される可能性をもつ *hitting* (現在分詞)、*to hit* (*to* 不定詞)、*hitting* (動名詞) もこの関係にあると考えられる¹⁴⁾。また、文法的には *hit* の位置を占める資格がなくても (即ち、動詞以外の品詞であっても)、その (音) 形の類似から *kit*、*mitt*、*slit* が、意味の連想から *blow*、*knuckle*、*slap* といった類義語のほか、場合によっては対義語や同義語を想起することも可能となる。

ソシュールは、このように、同一のコンテキスト内で相互排除・対立の関係にある記号を、連合関係 (*rapport associatif*) と呼んだ。

② 連辞関係

連辞関係とは、個々の文構成要素としての言語記号の意味と文法的な機能とが、言語記号相互の関係の中で決定するというもので、与えられた一定のコンテキストにおいて直接観察されるものである。例えば、*She put her head on my shoulder.* という文が過去の事実を表していると判断されるのは、述語動詞である *put* が三人称単数の主語 (*She*) に先立たれているからである。もしも、その前に一人称単数や二人称単数の主語 (*I*, *You*) があり、後続する二つの名詞句の人称代名詞所有格 (*her head*, *my shoulder*) が *my head* や *your shoulder* であったら、何らかのコンテキストがない限り時制を特定することが非常に困難になる。

ソシュールの『一般言語学講義』には、連合関係と連辞関係とが相互依存・不可分の関係にあり、また、パロールの実現においては同時に発動されるということが、次の例を引き合いにして説明されている。

From the associative and syntagmatic viewpoint a linguistic unit is a fixed part of a building, e.g. a column. On the one hand, the column has a certain relation to the architrave that it supports; the arrangement of the two units in space suggests the syntagmatic relation. On the other hand, if the column is Doric, it suggests a mental comparison of the style with others (Ionic, Corinthian, etc.) although none of these elements is present in space: the relation is associative.

(Baskin 1966, pp.123-124)

ソシユールは、同一のコンテキスト内で「それ（記号）に先行するもの、後続するもの、もしくはその双方と、対立することによってはじめて価値をえる。」（小林 1972, p. 72）関係を連辞関係（rapport syntagmatique）と呼んだ。ソシユールが記号に連辞関係を認めたことにより、伝統文法において語や句の統合・配列を担う統辞論（或いは、統語論）として理解されてきたものと、語の構成要素の統合を担う形態論との境界が取り払われた。これは、言語を量的な意味で階層構造と捉えていた伝統的な言語学にとって、画期的な発想であったと言われている。（丸山編 1985, p.71）

③ 言語記号の線状性

人間は、概念化を可能にした心的な記号を、実質を伴った言語記号として表出させることによって、他者とのコミュニケーションを実現している。その際、発話の主体となる人間¹⁵⁾は、未だ選択されていない段階の辞項（即ち、連合関係にある心的記号群）を、時間的・空間的に、線状的に配列（即ち、連辞関係を形成）する。実質を伴った言語記号として表出した物理的な音が聞き手の耳に届くと、その聞き手は概念化の過程を経て意味を理解し、必要に応じて、今度は発話者として、言語記号を媒体として、相手に意味を伝える。このような手順で、人間は言語に情報伝達という社会的な役割を課している。

ソシユールが記号学の第二原理とした線状性を理解するためには、線状性の有無と、記号の表示形態（即ち、シニフィアン）との関係を整理しておく必要がある。それを表したものが、下の表1である。

表1 線状性とシニフィアンの性質

	聴覚情報	視覚情報
線状性がある	話し言葉	書き言葉
線状性がない	生活音全般	写真・地図・ジェスチャー

線状性がない「生活音全般」とは、自然の中で感じるすべての音（例えば、川のせせらぎや虫の声）から、扉の開閉音や料理をする音までが含まれる。線状性がない視覚情報とは、その意味を理解する過程において、特定の順序や方向（性）を要求していないものことである。

話し言葉と同じカテゴリーに区分されるべきモールス信号と、書き言葉と同じカテゴリーに区分されるべき手話は、上の表1から除外されている。その理由は、それぞれの記号のシニフィアンとシニフィエの結びつき方が完全な1対1の関係にあり、それぞれが社会的な機

能を果たす上でコード（即ち、辞書）からの逸脱をまったく許容していない（即ち、まったく場面や文脈に依存していない）からである。この点において、言語は、その他の機械的な記号体系とは一線を画するものである¹⁶⁾。

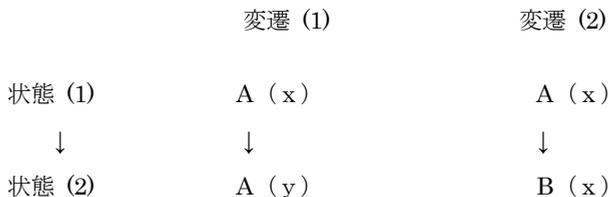
ここで特筆すべき点は、人間が、雨音や夕焼けのように、線状性がない自然現象に意味を見出し（より厳密には、意味を創出し）、電車の中で耳にするような、連続的な音に秩序を見出しているということである。これは、人間が記号を媒体として未分化の現実を意味づける際、自らが解釈し易い方法を選択していることを表わしている。言語記号の線状性には、社会的なコードとしてのラングのみならず、特定の人間によって創出された意味生成のプロセスが痕跡として残されているのである。

(5) 通時態と共時態

言語記号の可易性とラングの不易性を認めることにより、ソシユールはコトバというものが潜在的に変化の可能態であるということに加え、その変化を正しく捉えることの重要性を主張している。その方法として、ソシユールは、時間の流れの中で顕現する「実質的な変化」と体系の中で他の言語記号との「関係から成る変化」とを対立させ、それらは等価値ではなく、したがって、その扱い方も異なるべきであると考えた。そのうえで、ソシユールはコトバに「通時態 (diachronie)」としての側面と「共時態 (synchronie)」としての側面を認め、共時的な研究を優先させるべきであると主張する¹⁷⁾。これは、ソシユールがコトバの通時的な研究を軽視したためではなく、比較言語学や歴史言語学の方法論上の反省に基づいた判断である。

上で述べた「実質的な変化」と「関係から成る変化」とを比較するため、2種類の変遷が2つの時間（下の図5では「状態」）の間で起こったと仮定し、その違いを説明する。大文字で表されたものは体系内の要素 (A, B)、小文字で表されたものは体系内で各要素が果たす役割 (x, y)、そして、矢印は時間の経過を表している。

図5 2種類の変遷



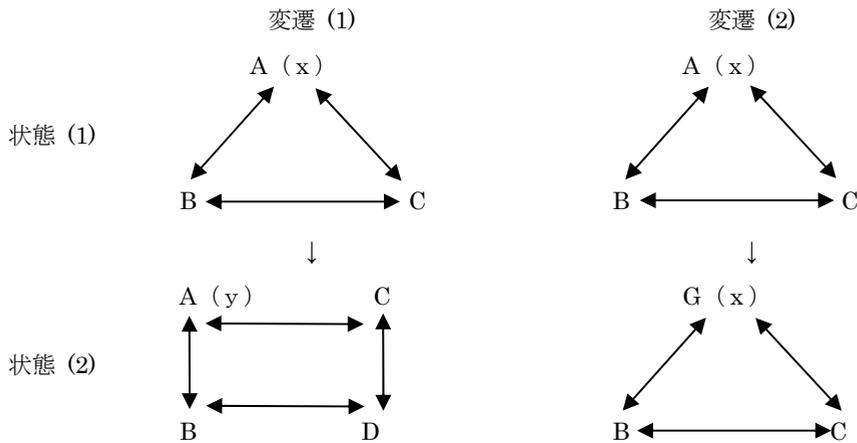
(丸山 2008, p.86)

一部、筆者による加筆あり

変遷(1)から「状態の変化に伴い、Aは変化しなかった」、変遷(2)から「状態の変化に伴い、AはBに取って代わられた」という解釈は必要にして十分なものであろうか。変遷(1)は、実質的な変化をしていなくても、その体系内で果たす役割が変化していることを表し、変遷(2)は、実質的な変化をしても、その体系内で果たす機能が変化していないことを表している。ソシユールは、いかなる要素も体系の中でしか意味をもたないと考えたので、各要素の本当の役割を見極めるには、ある状態における体系の中において共時的な分析を行い、その後で別の体系への移行を通時的に捉えるという手順が有効であると主張する。したがって、実質的な変化をした変遷(2)より、要素間の関係性の変化であることを示す変遷(1)の方がソシユールにとってより重要な変化ということになる。

しかし、図5には2つの異なる状態（即ち、2点の時間）における変遷という事実しか示されていない。そのため、その変遷がどのようなメカニズムで起こったのかを判断することはできない。そこで、丸山（1981、2008）を参考に、この変遷を「面の歴史」として捉え直してみる。

図6 面の歴史



(丸山 1981, pp.108-109、丸山 2008, p.87)

一部、筆者による加筆あり

状態(1)において、変遷(1)、(2)とも、要素Aはその他の要素B、要素Cとともに3項関係を形成し、そこには(x)という役割があることを示している。しかし、時間の経過とともに状態(2)になると、変遷(1)には要素Dが加わり、その結果、4項関係が形成されている。それに伴い、要素Aの役割は(y)に変わってしまった。それに対し、変遷(2)の状態(2)では、要素Aが要素Gに変化してはいるものの、体系内の関係には変化が見られない。これは、状態(1)という共時的な研究において体系内要素間の関係を観察していたからこそ、通時研究として状態(2)を知るに至るという手順を示している。

Ⅲ ソシュールの思想に対する評価の妥当性

ソシュールは、言語研究の歴史において、さまざまに批判されてきた。本章では、そうした批判を3つの型に分けて再検討し、批判の妥当性を問い直そうと試みる。以下で分類される批判の型は、1. ソシュールの著作とされた『一般言語学講義』の成立事情に関連するもの、2. 対象の認識過程と記号理論に関するもの、そして、3. 歴史認識にかかわるものである。

1. 『一般言語学講義』の成立事情に端を発した批判

本節は、『一般言語学講義』（以下、『講義』とする）の成立事情がソシュールの思想や言語理論の不理解を引き起こす原因となったという事実に基づき、『講義』に対する批判は、必ずしも妥当なものではないということを検証する。

『講義』は、ソシュールの直筆ではない。彼がジュネーブ大学で3回にわたって行った一般言語学講義（1907年、1908-9年、1910-11年）の内容を、学生のノートをもとに、彼の弟子であるバイイ（Charles Bally）とセシュエ（Albert Sechehaye）が編纂したものである¹⁸⁾。

ソシュールは『講義』の出版を待たずに亡くなったため、彼自身がその内容を確認するすべはなかった¹⁹⁾。しかし、世界中の言語研究者にとって、『講義』はソシュールの言語理論や思想を知るうえで、唯一の媒体となったのである。たとえ弟子たちの手による削除・加筆・変更が編纂の過程で必要な作業であったとしても、その結果、『講義』の内容自体が整合性を欠いていると判断されれば、その批判や非難は彼らの師であるソシュールに向けられるのは、当然のことである。

後年、他の学生の講義ノートが出版され、ソシュール自身の手による資料（即ち、遺稿）が新たに発見されると、それらの原資料と『講義』とを突き合わせて、ソシュールの思想を正しく理解しようとする研究（いわゆる、ソシュール学）が盛んに行われるようになった。

（日本では丸山 1981、丸山 1983、丸山編 1985 が最も詳しいとされている）現在では、ソシュールに対する批判の多くは、『講義』の編纂過程で弟子が起こした無理解が原因であったということや、そうした誤りに対する異議申し立てに過ぎないということが徐々に解明されつつある。

丸山（1981、pp. 56-73）は、バイイとセシュエが編纂の過程で犯した誤りを5種類に分類している。それを具体例とともにまとめたものが、下の表2である。英文の引用は Baskin（1966）からのもので、和文の引用は丸山（1981）による。カッコつきの数字は、それぞれに出典されたページを表している。具体例に付された下線は、筆者が対比や強調を目的としたものである。

表2 バイイとセシュエの誤り

	分類	具体例
1	転倒現象	But actually values remain entirely <u>relative</u> , and that is why the bond between the sound and the idea is radically <u>arbitrary</u> . (113) ↓ But actually values remain entirely <u>arbitrary</u> , and that is why the bond between the sound and the idea is radically <u>relative</u> .
2	加筆・創作	...the true and unique object of linguistics is language studied in and for itself. (232)
3	欠落・捨象	このことは、これまで私がそれらを対置させずに分けないでおいた二つの関係を現前させる。恣意的な関係を考える場合には、注意深く峻別すべき二つの関係が登場するのであって、一つはすでに問題にした[縦の]関係(↑)、もう一つは[辞項間の横の]関係(↔)である。(68) (コンスタンタンのノート、第3回講義、306ページ。断章番号3350)
4	分断・混合	Phonemes are above all else <u>opposing</u> , relative, and negative entities. (119) ↓ When we compare sings—positive terms—with each other, we can no longer speak of <u>difference</u> ; ...Between them there is only <u>opposition</u> . (121)
5	改竄	...That is why the linguist who wishes to understand a state must discard all knowledge of everything that produced it and ignore <u>diachronie</u> . (81)

バイイとセシュエが犯した過ちは、ソシュールの思想を理解しようとする後発の研究者の理解を遠ざけたという点で罪深い。しかし捏造ともとれる上の表2の「加筆・創作」をもとにソシュールを理解してしまった研究者が存在するという事実を見落としてはならない。

田中(2009、pp. 123-132)は、ソシュールと同時代の社会学者であるエミール・デュルケム(Emile Durkheim 1858-1917)の「社会的事実」を引き合いに出して、ソシュールのラングはデュルケムの「意識主体としての個人に対して外在的な社会的制約」が色濃く残された概念であると捉えている。その根拠として挙げられているのは、以下の5点である。

- ① ソシュールの講義より10年前に、デュルケムはこの用語を社会学において論じていた
- ② この用語は、「個人の欲すると否とにかかわらず個人をしぼるような、一種の命令的また強制的な力をもつもの」として定義されている
- ③ この用語の具体例として、デュルケムは「自分の思想を表現するために用いる記号の体系」を挙げている
- ④ デュルケムが考えた社会学の研究手法、「集合的思惟の研究は、…それじたいとして、またそれじたいのために研究されねばならない」と、上で捏造とされた表2の「加筆・創作」との間には、著しい共通点が見受けられる
- ⑤ ポーランドのドロシェフスキーは、「ソシュールのラングは、デュルケムの『社会的事実』

の再生」だと捉えている。

田中がソシュールの「ラング」にデュルケムの社会学的概念を見出したのは、ソシュールが既存の学問領域をすべて包摂する、新たな領域を想定していたという事実からの推測であった²⁰⁾。同時代の学問的潮流に対し、ソシュールが多大な関心を寄せていたということは理解できるが、「ラング：社会的事実：社会学の影響」という連想は飛躍し過ぎと言わざるを得ない。

2. 対象認識の過程と記号学理論

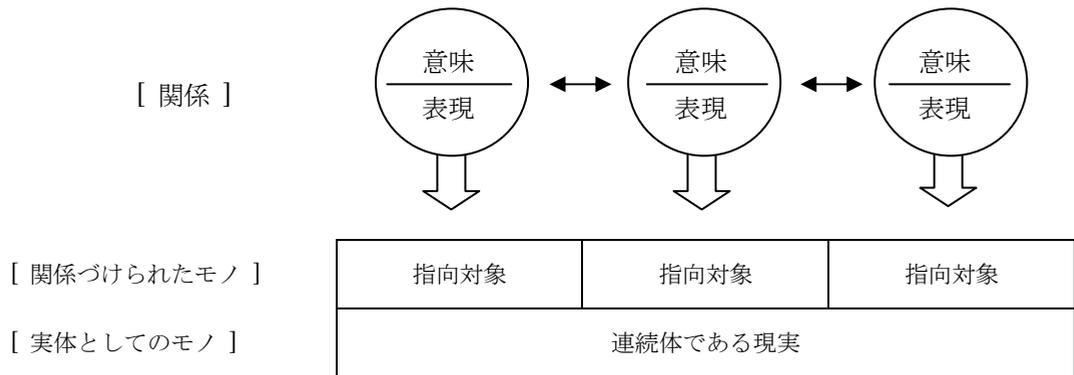
ソシュールの言語理論が誤解を招いた理由は、その革新的な発想法にあるとも言われている。その典型的な例として、対象認識²¹⁾の過程が、ソシュール前後ではどれほど違ったものとして受け取られていたのかに注目してみたい。

ソシュール以前の言語研究者は、あらかじめ認識の対象となるモノ（或いは、個物）やコト（例えば、観念、抽象概念、純粹理性）の存在を認め、言葉というものは、認識の対象に貼りつけられた名前（或いは、ラベル）に過ぎないと考えた。また、認識対象に付された音が結合することによって語が形成され、その語が他の語と所定の法則で結合すると文が形成されるという順序で、言葉は量的に組み上げられるもの（即ち、階層構造をもつもの）として思い描かれていたのである。それに対し、ソシュールは、いかなる認識対象も言葉以前には存在せず、そこにあるのは未分化の連続体としての現実のみであると考えた。

何らかの理由である対象に人間の意識が向けられると、未分化の連続体であった現実は分割される。同時に、認識主体としての人間が感知することができるように、心的な単位としての記号が要請され、その内容部と表示部が結びつけられる。実質を伴わない形相としての記号が指向対象と関連づけられることにより、認識対象は輪郭を与えられ、概念化が達成される。

概念化に至ると、心的な記号は、差異性に基づいた価値の体系（即ち、ラング）に取り込まれる。心的記号は連合関係から選択され、認識主体が属している言語共同体の文化的・社会的な慣習に従って構造化され、実際の言語使用の場面では実質を伴う（即ち、意味と形態から成る）言語記号として表出する。こうした一連の過程を経て、人間ははじめて対象の認識に至るとソシュールは考えたのである。これを表したものが、下の図7である。

図7 ソシユールによる対象認識



(丸山 2008, p.104)

ソシユールの対象認識の過程から帰結されるのは、対象の意味というものがもともとその対象に内在する（即ち、言語外事実として存在する）のではなく、人間が主体的にその対象を認識しようとする意識のはたらき（即ち、心理的なはたらきかけ）によって生成されるという事実である。

ソシユールにとって、意味の問題は言語学が取り組むべき問題であり、その意味を言語学が研究対象にするためには、実質を伴わない（即ち、心的な）記号という概念を想定することが必要であった。では、実際に目で見たり手で触れたりすることができない記号という概念を想定することによって、ソシユールはどのような利益を得たのであろうか。

実際の言語使用の場面において、想起されることがあっても顕現しない、心的な記号というものを想定することにより、少なくとも2つのメリットが期待される。第1のメリットとして考えられるものは、人間が主体的に意識を向けたものの意味を理解する過程において、心的な記号は「参照点」に成り得るという点である。認知心理学の用語を用いると、意識を向けただけでは焦点化できなかった対象も、そこに何らかの枠組みや背景を設定することにより、その認知が可能になる（或いは、認識に至る過程において、負担が軽減される）。認知心理学では、参照点を経由して対象を認知する過程を「ピリヤード・モデル」と呼ぶ。

第2のメリットは、言語の本質を恣意的なものであるという誤解を回避することが可能になるというものである。「言葉とは何か」という根源的な問いに対して真正面から取り組もうとした場合、言語を極端なまでに主観的なものとして接近するか、その逆に、極端なまでに客観的なものとするかという判断を下そうとする。しかし、心的な記号というものを想定することにより、ソシユールは、言葉の本質に対する疑問に対して『そうになっているからそうなのだ』という記述を避けることに成功した。ソシユールにとって、記号の体系とは、人間が意識を向けることによって意味を読み取ろうとする対象の総体である。記号の体系の中でも、とりわけ、言葉は他の記号体系を包摂する、特殊なものである。心的な記号による橋渡

しで概念化された意味を読み取るという一連の過程からの類推で、言葉の本質を捉えることができる考えたのである。

しかし、言語研究の対象から実際の言語使用（即ち、パロール）を排除したことにより、ソシュールが取り組んだラングは、心的な言語使用としての「内言」だけであるという批判を受けた。記号が心的な体系レベルから実用的な使用レベルに移行する点について、『講義』には何ら記述がないため、この批判は受け入れざるを得ないであろう。

3. 言語学史の誤認：神格化されるソシュール

本節では、言語研究の歴史認識の誤りや無知からソシュールを神格化してしまい、その思想や学説を正しく批判できずにいるという状況に陥る危険性について、田中（2009）を参考に、再検討する。

拙稿、高野（2009, p.79）で明示したように、筆者にとって、言語学史研究の意義とは、「新たな知を生産する人間的な思考」であり、「行き過ぎた知の追及からの回帰や自己抑制」であるとともに、「人間が選択し得る新たな視点とその導入の軌跡をたどる」ことにある。（ibid, p. 79）なぜなら、学問研究をはじめとした人間の知的活動というものは、対立や批判によってのみ創造されるのではなく、人間相互の知的な「連鎖」や「累積」の過程において形成されるものと捉えているからである。また、言語学史研究においては、特定の個人が自己の外部（即ち、文化的・社会的な一切の関係）を遮断した環境において、これまでに存在しなかった思想や学説を構築することは不可能である。なぜなら、すべての思想や学説の成立には、それに先立つ研究が必ず存在するからである。

しかし、こうした考えとは対極をなす、いわば、特定個人の功績を盲信する研究（者）が存在することについて、田中（2009）は次のように警鐘を鳴らしている。

…思想的、精神的な後進国では、みずからは思考せず、新しい流行が現れるやいなやその信者となるという風土にあつては、新しい理念や思想はどこかに天才があらわれると、そこをめぐって、まるで虚空から降ってくるように思われているふしがある。

（田中 2009, p.132）

田中の視点を本稿の取り組みに置き換えると、どれほど完全なる純粋理性に基づいてソシュールを再考することができたかという点で、反省する点が多いのは事実である。例えば、田中は共時態という言語研究の方法を例に、言語学史の誤認について指摘する。

…言語から歴史を排除した、共同の体系として思い描く作業は、コセリウが印象的に示したように、ソシュールからさかのぼってゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツにつながり、

ガーベレンツはまたハイゼからこの視点を受けとっていることがわかる。したがって、共時態という方法を、ソシユールを起源として考えることは、言語学史への無知から来る誤りである。

(田中 2009, p.120)

こうした言語研究史の誤認が起こる原因として、学校教育というものが関係していることも認めなければならない。教員が学生を選ぶことができないように、学生は教員を選ぶことができない。したがって、シラバスが公開されている大学でも、「どの教室へ行くと、誰の言語理論を重点的に学ぶことになるのか」、「そこで習う言語理論は、現代の言語学の世界において、どの程度、妥当なものとされているのか」ということは、ほとんどの場合、その教室で授業を担当する教員の研究履歴に依存していると言わざるを得ない。他方、教員側も、哲学的に師事する言語学者の理論や、指導教授が専門とする理論を重点的に研究してきたことであろうから、特定領域の理論にのみ精通しているということがあり得る。教室では教壇に立った教員の歴史認識が学生に伝えられるのだから、その影響力は非常に強い。そうした環境においては、歴史の誤認が連鎖することも考えられるのである。そうした不幸を避けるためにも、言語学者は言語研究史を定期的に検証することを怠ってはならない。

IV. 終わりに

本稿は、これまで、ソシユールの言語理論の基盤となるいくつかの原理をできる限り忠実に再現し、言語研究の歴史的事実に基づいて、ソシユールに対する評価の妥当性を問い直してきた。しかし、この取り組みによって直接的に導き出されたものは、ソシユールに対する評価の妥当性を判断する基準というよりは、むしろ、ソシユールの思想そのものであったように思われる。やや逆説的ではあるが、ソシユールは、特定領域の研究対象だけを「閉じた体系」として研究している限り、その本質を解明することはできないと考えていた。差異性に基づいた価値の体系について繰り返すまでもなく、言語の本質は言語自体に内在しているのではなく、その周辺領域（即ち、言語以外の現実世界）を経由しなければ見出すことができないと信じていたのである。言語が実際に使用される場としての社会、それをを用いて社会的機能を果たそうとする人間、更には、その使用によって構築される文化とのかかわりについて取り組むことを、ソシユールは後発の研究者に求めていたようにさえ思われる。このように仮定すると、古くから議論されてきた言語の本質にかかわる問題の捉え方を変える必要に迫られることになる。

言語研究の歴史において、言語は自然なものであるか、文化的なものであるかということが議論されてきた。この対立を、直接、二律背反の関係であると決めつける限り、その結論

を導き出すことは困難である。しかし、一方から他方への段階的な揺らぎとして捉えれば、「どちらか一方ではないが、どちらでもあり得るもの」という捉え方が可能になる。事実、多くの研究領域において、その研究対象の属性には段階性が受容され、その多くは程度問題として扱われている。ここで、言語学が扱う「構文選択」を例に、より詳しく説明してみたい。

同一の客観的な事態に複数の表現形式が可能な状況において、人間は、「より自然である」と感じられるものから、「あまり好ましくない」と思われるものまでを段階的に使い分けるとともに、その妥当性をその場の程度問題として受け入れている。個々に取り扱っただけは、どれほどその表現形式が的確であるかを判断することが困難な対象でも、別の対象（即ち、表現形式）と相互に関連づけることによって、その表現形式の妥当性を判断することが可能になるのである。このように、複数の対象を相互に関連づける能力こそが人間に備わった言語能力であるとするれば、言語の本質は、人間という対象をより精密に研究しなければ見出すことができないということになる。最新の言語理論が人間の心の揺らぎや身体的な特徴を取り込むことによって言語の本質に接近しようとする試みは、この点において正しい方向性であると考えられる。

研究対象の段階性ということをもとにソシュールの評価の妥当性に話を戻すと、その理論基盤との関係で、ある結論を導き出すことが可能になる。実体を伴わない（即ち、心的な）記号相互の差異性に基づいた関係、及び、その総体としての価値の体系という独自の記号論を導入し、人間の言語能力（とりわけ、対象認識能力と伝達能力）を実証し、更には、膨大な言語データに基づいて言語の本質を科学的に解明しようとしたという点において、ソシュールは確かに「言語学の祖」であった。しかし、記号の内部構造（即ち、シニフィエとシニフィアン結びつき）の恣意性に段階性を認めなかったため、ソシュールは、その対象である言語を「閉じた体系」に押しとどめてしまい、結果として、自らの言語理論だけでは言語の本質に到達できなかったのである。

今となっては、ソシュール自身が筆者と同じ結論に到達していたかどうかを知ることはできない。まして、ソシュールが自らの言語理論の限界を理由に書物を残さなかったなどと考えるのは、言語研究史の誤認となるであろう。その答えを確かめる方法があるとするれば、ソシュールの後継者たちが発展させた（ヨーロッパ）構造主義言語学の研究成果を再考すること以外には考えられない。

注

- 1) ソシユールの一般言語学に関する構想が 1890 年代に始められていたことは、『メイエへの手紙の中で彼（ソシユール）が約束した《一冊の本》は、一八九三年頃から書き始められていた手稿 9、11、12 がその草稿と見られるが、…未完のままに捨ておかれ、生前には誰の目にも触れることがなかった。（丸山 1981, p. 38, カッコは筆者による）』からも、推測できる。
- 2) ヨーロッパ大陸では「記号学 (semiology)」、イギリスとアメリカでは「記号論 (semiotics)」という用語が用いられる。
- 3) いわゆる「ソシユール学」というもので、日本では丸山 (1981, 1983) が特に際立った成果を上げた先行研究として認められている。
- 4) 鶏の孵化を例に、言語習得という人間特有の生得的な能力と関連づけて、丸山は次のように説明している。
ここに、鶏の受精卵と非受精卵があるとします。まず受精卵のほうは、当然ながら孵化する潜在能力をもっていますが、親鶏の羽の下かそれに類する環境のもとにおかない限り、決して雛はかえらないでしょう。一方非受精卵の方は、孵化能力をもともたないのですから、どんな適切な温度であたためても、これが雛とならないのも当たりまえの話です。この孵化能力に譬えられるものがランゲージであり、これを顕現させる環境が社会生活であり、雛鳥がラングなのです。（丸山 2008, p.69）
- 5) ラングは社会制度として人間の思考や行動を規制する一方で、実際の言語使用（パロール）を通じていかようにも修正され、変更が加えられる可能性を潜在的にもっている。このように、ラングのもつ二重性がコトバの本質とかかわるといことがソシユールによって示唆されていたということは、重要な事実である。
- 6) 「ラングが保証する以上の意味」とは、「増幅（即ち、+拡張）」と「縮小（即ち、-拡張）」との両義を備える「拡張」のことである。
- 7) 可易性と不易性という二重性もまた、言語記号の特性を表している。
- 8) チョムスキーの言語理論における人間も、極度に理想化され、決して誤りを犯すことの無い個人、及び、集団を意味していたという点は、注目に値する事実である。
- 9) …科学のほうからその思想と同じ価値観に立って見て、そして同じような客観的条件のもとで、同じ概念装置によって追究して見て、果たして実現可能であるかどうかを検証する。これがいま申しましたウェーバーの有名な「科学は思想を批判する」という考え方、＜価値批判＞…。ところが、エピステモロジーというのは辞書で引いてみるまでもなく、まったく正反対の概念なのです。つまりこれは「思想の側からの科学批判」、＜価値批判＞が「科学は思想を批判する」のであれば、エピステモロジーは、「思想が科学を批判する」。（丸山 1983, pp. 9-10）
- 10) 丸山 (2008, p. 74) より。ソシユールはこの体系の概念から差異性に基づく価値の体系（即ち、記号体系）を想定し、次いでそれをラングにあてはめて、言語記号の体系として捉えた。
- 11) 体系の構成要素を最小単位まで分節し、それを組み上げることによって体系の全体像を想定することができるという考えで、旧来の意味論が用いた構成性の原理に通じるものがある。
- 12) この form を「形式」と解釈してはならない。なぜなら、形式は「内容」の対義語だからである。これは「形相」であり、プラトンの「イデア」を洗練させたアリストテレスが「個物」との対比によって導き出した概念である。これ以降、筆者は、人間の意識が現実世界に向けられると

同時に形成される「形相」としての記号と、実際の言語使用の場面でコミュニケーション機能を果たす「実質」としての言語記号とを分けて捉える。

- 13) ソシュールの連合関係は、後にデンマークのイェルムスレウ (Louis Hjelmslev よって「範例関係 (paradigmatic relation) 」) と言いかえられる。それを受けて、丸山 (1981) は『ソシュールの考えていた「イメージの絆」という豊かな発想が幾分とも損なわれたのは残念なことと言わねばならない (p. 99)』と指摘する。この指摘を受け、本稿は、意識的・無意識的な連合関係を認めている。その結果、連合関係と連辞関係との間に相互依存関係が認められている。
- 14) この連合関係が (直後の) 連辞関係からも説明できるのは、これら2つが相互依存の関係にあり、不可分の関係にあり、同時発生するためである。
- 15) ここで「発話主体」を例にしたのは、音声言語だけを対象として説明するためではない。事実、文字言語にも線状は認められる。線状性が観察される記号のシニフィアンを「聴覚情報」と「視角情報」とに区別するためである。
- 16) 表1の分類だけで人間の言語を他の記号体系から自立させることはできない。なぜなら、記号論に基づいたコミュニケーションについて考える場合、人間の経験や身体性に基づいた心理学的、生物学的、生理学的類型を導き出すだけの基礎データと、そこから一般化された基準が必要だからである。それに次いで、媒体の形態や種類、及び、その複雑さを考慮しなければならない。このほかにも、時代とともに変化・進歩する情報端末、マスコミュニケーションの社会的な機能、政治的・思想的表現の多様性についても再検討の必要がある。さらに、人間を取り巻く記号体系には、流行や (場の) 雰囲気のように、視覚や聴覚では捉えられないものも含まれるということも重要である。
- 17) ソシュールは、共時態と通時態という2つの次元で言語を捉えることの重要性和同程度に、取り組みの順序を定めることの必要性を示している。
- 18) 『一般言語学講義』が、ソシュールの承認を得ない死後出版であるのは周知のことだが、学生たちの講義ノートから驚くほどの短時日でこの書物を編み上げた当のバイ (Ch. Bally) とソシュエ (A. Sechehaye) が、三回にわたる一般言語学講義のどれにも出席していなかったという事は、意外に忘れられている。(丸山編 1985, p. 93)
- 19) 一九一二年夏、ソシュールは病に倒れて学年度の終わりを待たずに一切の講義活動を中断する。友人のダヴィッドの、「病気のせいで声の質が変わったとはいえ、その威厳と優しさは失われなかった」という証言その他からも推測されるように、ソシュールは喉頭癌におかされていたらしく、ついに一九一三年二月二十二日の夕刻、夫人の持家であったヴェフランの城で静かに息をひきとった。享年五十五であった。(丸山 1987, pp. 59-60)
- 20) しかし、上の④で見たような対応関係が存在しないことを原因として、後発の研究者が不毛な議論や批判に時間を費やすことになったということも事実として認識しなければならない。
- 21) 対象認識の「対象」を、実質を伴うモノとして捉えてはならない。実質を伴うモノを認識するために人間は言語を使うという発想は、人間が対象を認識する以前にその事物が存在していることを前提としてしまい、言語命名目録観に逆行してしまうからである。

参考文献

- [1] Baskin, Wade (1966) *Course in General Linguistics: Ferdinand de Saussure*, Charles Bally and Albert Sechehaya published in collaboration with Albert Riedlinger (1916), McGraw-Hill Book Company, New York
(translated)
- [2] 池上嘉彦 (2002) 『自然と文化の記号論』財団法人放送大学教育振興会
- [3] 市川 浩 (1975) 『精神としての身体』勁草書房
- [4] (1980) 『身体—身の現象とその境界』講座現象学 (vol. 2) 弘文堂
- [5] 川本茂雄訳 (2002) 『ソシユール』岩波現代文庫、Jonathan Culler (1976) *SAUSSURE*, Fontana Press, London
- [6] 小林英夫訳 (1972) 『フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学講義 (改訂版)』岩波書店、Charles Bally et Albert Sechehaya (pub.) avec la collaboration de Albert Riedlinger (1916) *Cours de linguistique generale*, Lausanne et Paris, Payot
- [7] 千石 喬 (2001) 「フンボルトの後継者 ヴァイスゲルバー (Leo Weisgerber, 1899-1985)」、『言語—2001・2 別冊—言語の20世紀101人』pp. 92-93 大修館
- [8] 高野秀之 (2009) 「言語学史概論—認知革命が起こるまで—」『嘉悦大学研究論集』(通巻95号 pp. 77-99)
- [9] 田中克彦 (2009) 『ことばとは何か 言語学という冒険』講談社学術文庫
- [10] 田中春美編 (1988) 『現代言語学辞典』成美堂
- [11] 中村・後藤訳 (1992) 『言語学史 第三版』研究社、Robins, R. H (1990) *A Short History of Linguistics (Third Edition)* Longman
- [12] 町田 健 (2004) 『ソシユールのすべて—言語学でいちばん大切なこと—』研究社
- [13] (2004) 『ソシユールと言語学』講談社現代新書
- [14] 丸山圭三郎 (1981) 『ソシユールの思想』岩波書店
- [15] (1983) 『ソシユールを読む』岩波セミナーブックス2
- [16] (1987) 『言葉と無意識』講談社現代新書
- [17] (2008) 『言葉とは何か』ちくま文芸文庫
- [18] 丸山圭三郎編 (1985) 『ソシユール小事典』大修館

(平成22年5月24日受付、平成22年7月23日再受付)